

機関番号：37502  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520587  
 研究課題名（和文） 環境歴史学からみた「森」と「原」「野」に関する研究－日本の古代・中世を中心に－  
 研究課題名（英文） A study on Forest and Grass-field from the standpoint of Environment-History  
 研究代表者 飯沼 賢司 (IINUMA KENJI)  
 別府大学 文学部 教授  
 研究者番号：20176051

研究成果の概要（和文）：本研究では、環境歴史学の観点から、古代・中世においては、対極に位置づけられる森と原野について検討を行った。阿蘇での研究の結果、阿蘇神社の祭礼の中心となっていた下野地区では、野を下野と呼び、森を鷹山と呼んだ。この野と森は、阿蘇の人々の火（野焼き）と水（水田）の利用の象徴的場として機能してきたことが明らかになった。平安京でも、野と森は、都市郊外の自然空間と認識されながらも火と水の象徴地として存在していた。平安時代には、都周辺の野は火葬地となり、水源である神聖な神社の対極に位置づけられた。田舎においても、都市においても、この時期、野と火、森と水の関係は共通していたといえる。

研究成果の概要（英文）：From the standpoint of Environmental History we studied the concept of Forest and Grass-field that should be placed at opposite concept in Japanese ancient and medieval periods. We examined the concept in Aso-Shimono village that lead the ASO shrine festivals and found that the grass field was called to be ASOSHIMONO and forest area was called to be TAKAYAMA. It was also detected by this research that the grass field and forest areas were understood as symbolic terms for the use of fire (burning field) and water (paddy field) to the residents. Those people who live in city area as HEIAN capital also realized that Forest and Grass-field were natural spaces and they were the symbolic terms of water and fire as same as ASO area. The grass-field around the city became crematory against holy forest that was a source of water in Heian period. It was concluded that the relationship between grass-field to fire and forest to water was the same concept in both countryside and city area during that period.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：森 野 火 水 野焼き

## 1. 研究開始当初の背景

清少納言の『枕草子』では、「森は」のくだりが二箇所ある。なぜ、二つの段に分けられ記載されたかは明らかではないが、108段では、後ろが「原は」となっており、木の茂る森と原の対比で登場したと考えられる。これに対して、194段では、後ろが「寺は」となっており、寺院に対する神社の名所として並べられた。同一の地名が登場している部分もあるが、木の茂る森と神社を指す森を「森」という同一の表記で表した。

現代でも、わたしたちは、神社を「森」などといい、神社には「森山」の地名をもつ所も多く、神社には森がつきものであると考えている。京都では、下鴨社を「糺の森」といい、近江の蒲生野の老蘇の森も有名である。大分県の竹田地方でも、穴森や扇森など森を名乗る神社がある。

日本人は古くから森に神が宿ると考えてきた。神社の御神木もその象徴であり、神への信仰の背景にはこの森への畏敬の念が潜んでいた。寺と対照化される理由も神仏習合の表裏一体の関係からきたのであろう。この面での研究については、応募者は、拙稿『八幡神とはなにか』（2004年、角川書店）などで神仏習合論の視点から検討を行っている。また、中世のムラの水源としての鎮守【森】の検討は、「環境歴史学序説－荘園の開発と自然環境」（『民衆史研究』61号 2001年）、「絵図にみる神社と荘園開発」（西谷地晴美との共著『土地所有史』2002年山川出版社）で論を展開してきたが、今回は、その方面の研究も踏まえつつ、本研究では、「森」と「原」の対に注目し研究を進めてみたい。

応募者は、すでに、「中世的土地所有の形成と環境」（『土地所有史』2002年）において、中世の「狩倉」における原と森のセットに注目した。しかしながら、古代・中世の研究では、これまで「森」や「原」「野」を直接的に歴史の研究組上に載せた研究は少ない。確か「山野河海」については、天皇の支配権、「山野」「狩倉」などの原野は領主の村落住人支配の面から論じる研究もあったが、それは農民などの再生産を維持する場としての山野への領主の介入であり、または新たな開発対象地としての「山野」支配として論じられており、そのままでは、積極的な土地利用の場であるとは見られてこなかった。

「原」「野」は、平安時代中期のいわゆる「大

開発の時代」には、あくまでも「荒野」などという語で開発の手の入っていない「未開発」の「無主」の地、開発対象地として注目されてきたのである。

しかし、古代においては、「原」「野」は積極的な土地利用の場であった可能性が高い。たとえば、「野地」という語は、「田」「畠」「屋地」とともに地目の一つとして、8～11世紀の史料に見られる。「野地」は、面積を示されることも多く、漠然とした「野」のイメージだけで「野地」が存在していたわけではない。そこには、積極的な「野地」の利用法が存在したはずである。

先に科研費基盤研究（C）「環境歴史学の視点に立つ中世荘園の研究－大分県直入・大野郡域を中心として－」（平成13～16年）でも明らかにしたように、『万葉集』の額田王の歌に「茜さす紫草の野行き標野行き野守が見ずや君が袖振る」という歌がある。「紫草の野」すなわち高級染料である紫草の栽培地として、「野守」が管理する野が存在した。地方でも天平9年の「豊後国正税帳」によれば、直入、玖珠の両郡にある「野」に「紫草園」が置かれ、大宰府と国衙の直接的管理下に置かれていたことが知られる。ここでは、野は重要な生産の場として位置付けられている。

また、同じ豊後国直入郡では、国司の管理する「牧」が存在していた。現在も直入・玖珠郡のくじゅう連山の周辺一帯、阿蘇へつながる辺には「野焼き」という方法で広大な原野を維持している。ここは、「牧」だけではなく、古代から狩り場としても機能しており、大野・直入には「騎獵の児」と呼ばれる馬に乗り、弓で獵を行う人々が多かった。9世紀代の大宰府は、この人々に目をつけ大宰府を守る「選士」という騎馬兵の要としてかれらを組織したのである。古代、「原」「野」は生産や利用の場として積極的な意味をもっていた。「森」に対して見ると、火をかけて焼くという方法で、積極的な人間の手の入った場所として位置付けられる。日本の自然環境の中では、手を加えなければ、「森」となることが必定であった。

本研究は、以上のような研究背景に基づいて、環境歴史学の視点から、8世紀から13世紀の時代に焦点を当て、「森」と「原」「野」を分析を通して、自然と人間の関係の変化を探ろうとするものである。また、本研究で

は、国文学からのアプローチ、その成果を歴史学のアプローチとコラボレートすることによって、環境歴史学の新たな研究展開を考えた。

## 2. 研究の目的

研究は、「森」と「原」「野」という対極にあるものを取り上げ、古代から中世の形成の社会の自然－人間の関係の特質を環境歴史学の視点から明らかにしようとする試みである。「森」や「原」「野」は水田や畑などの耕地に比べると、人間から遠い存在で、これまで歴史の研究の俎上にあがってこなかった。しかし、森と神社の関係、地目としての「野」の存在を考えると、自然と人間の関係を考察するもっとも重要なキーワードといえる。本研究では、歴史的アプローチと文学的アプローチを総合化し、阿蘇を中心に草原と森の関係を考察する一方、都市空間における森と野の役割を明らかにしようと考えている。

## 3. 研究の方法

研究は歴史学のアプローチと文学的アプローチの2つの方向から進めた。前者では、阿蘇地域を中心フィールドとして、文献的検討と祭礼、フィールド調査を駆使し、中世における野と森の利用を環境歴史学の視点から自然と人間の関係を解明した。後者では、中古の歌謡を中心とした文学の世界に表現された「野」と「森」の表現を検討し、都市空間における「野」と「森」の意味を明らかにしようと考えた。

## 4. 研究成果

4年間の研究は、農村部と都市部に広がる「森」と「野」の比較をしながら史的検討と現地調査を実施した。農村部としては主に阿蘇地域を対象にした。平成19年度から本格的に取り組んだ阿蘇下野狩の史料（永青文庫本『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』）の翻刻作業とその現地調査は4年間で大きな成果を得て、中世阿蘇神社の神事体系における「下野」の「野」と「森」の存在の意義をほぼ明らかにできたと考える。

阿蘇山の西麓に広がる「下野」と呼ばれる「野」は、天正6年まで旧暦の2月の卯日に狩神事が行われてきた。この神事は阿蘇の春を開始する祭礼であり、そこでは、古来狩の前に野焼きが行われ、獣を火で狩猟場の三カ所の「馬場」に集め、肥後に広がる社領から勢子・狩人3500人を動員し、騎馬70～80頭で猪・鹿や小物を射止めた。この野焼きの火は人間の貪・瞋・痴という三毒の煩惱の火を焼くといわれ、多くの人々がこれを見物し、

この神事は殺生の神事であるが、矢に当たった獣は往生を遂げ、後に神官に生まれ変わり、見物人も参加者も獣の往生を見て、その功德に預かれるとも説く。さらに、狩の終わった後は、この「馬場」には、阿蘇神社の神馬等が放牧され、12月の神馬貢納まで育てられた。この牧は「鷹山の牧」「鷹牧」とも呼ばれた。鷹山は「下野」一帯の「森」を指す言葉で、「鷹山」は同じ2月に行われる田作神事の際に歳祢の神のもとに訪れる姫神の住む山でもあった。春の阿蘇の田作りでは、鷹山の森の姫神（阿蘇山の水の象徴）が「里」の歳祢神の所を訪れ、その神婚によって五穀を産むといわれ、それを迎える神事が阿蘇の御前迎え（火振神事）であり、その最終段階が「田作り神事」である。中世、阿蘇の一年は、下野（鷹山ともいう）の「野」の火の神事とそれに続く田作り神事すなわち「森」の神事で開始される。ここには日本の「森」と「野」の役割の原型が見える。

この研究では、基礎史料となった永青文庫本の下野狩に関する史料を翻刻し、研究報告書に掲載した。さらに、昨年公開促進費を申請した結果、平成23年度出版できることになった。また、上記の阿蘇の下野を中心とする神事研究成果は、飯沼賢司「火と水の利用から見る阿蘇の草原と森の歴史」、山口佐和子「下野狩神事に見る「殺生の方便」」等の論文を研究報告書に掲載できた。

一方、研究代表は、総合地球環境学研究所のプロジェクト研究「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」の九州班の班長を務め、考古学や自然科学的手法を取り入れ、阿蘇・くじゅうなどの草原の形成・維持の問題を検討してきた。

ここでは、古代・中世という短期的な時間の中ではなく、狩猟・放牧と野の利用、火と野の関係を旧石器・縄文時代から検討し、阿蘇の「野」が縄文時代から維持されていることと推定した。日本の「野」は、自然にできたものではなく、人為的な火入れによって、「狩猟」「放牧」「農業」などに利用され、長年にわたる人間の営為の結果として維持されてきたことが明らかにされた。この研究も本研究に密接に連動しており、成果は飯沼と東京大学の佐藤宏之の編集で『野と原の環境史』として出版した。

一方、京都などの古代・中世の都市周辺部に広がる「野」と「森」の役割、都市における機能との関係に注目し、紫野や嵯峨野の調査を実施した。例えば、鴨川を挟んで下賀茂社の「森」と「紫野」は存在し、対極の関係にあり、密接な役割をもつ。「野」としての「紫野」では、平安中期・後期の数代の天皇等の葬送（火葬地）地があり、御霊会（やす

らえ花)が行われる。一方、この紫野には、野々宮としての齋院の御所があり、「糺の森」(下賀茂の森)と連携しながら賀茂の祭礼が行われてきた。両者には、どのような役割が与えられているのだろうか。この点については、歴史学の面では、まだ十分成果を出し得ていないが、本研究の国文的アプローチでは、歌謡や散文にみられる「場」としての「野」や「森」、さらに、そこで歌われる「歌」の役割に注目して特に都市部の「野」のもつ意味の解明を進め、研究分担者の浅野則子の論考「歌謡における「野」の意味—三代集を中心にして—」を研究報告書に収録することができた。

なお、昨年2010年3月、東アジアの中における「森」の役割を比較検討するため、中国雲南省の少数民族ハニ族のムラを訪れ、雲南省の南部の棚田地帯のムラの鎮守の森と水源の関係などについて調査を行った。ハニ族のムラでは、神山(龍山)からもたらされる水をムラの下に広がる棚田に引き、ムラには神樹(龍樹)という鎮守の森があり、この森は水源の象徴として認識されている。論文としてまとめるまでには至っていないが、調査紀行を補論として研究報告に収載した。

環境歴史学は、研究代表の提唱によって始まった新学術領域である。今回設定したテーマが従来の歴史学の幅を広げ、歴史事象の再検討を可能にすると共に、他の学問領域とのコラボレーションによって新展開がなされたと確信する。同時に、3月11日の東日本大震災を目の当たりにしたとき、自然と人間の対立、共生という現代的課題にもいくらか応えることができる研究を提示できたのではないかと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 飯沼賢司「永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』の成立とその史料価値」『史学論叢』40号 2010年3月 1-11頁 査読 無

② 浅野則子「変貌する感性—万葉集における蛩をめぐって—」『別府大学紀要』50号 2009年2月 1-9頁 査読 無

[学会発表] (計2件)

① 飯沼賢司「阿蘇下野狩神事から草原と森の世界を読む」鎌倉遺文研究会 於早稲田大学 2009年3月26日

② 飯沼賢司「阿蘇下野狩神事から草原の歴史を読む」総合地球環境学研究所主催研究集会「日本の半自然草原の歴史」 於 国立阿蘇青年の家 2008年9月13日

[図書] (計4件)

① 湯本貴和編シリーズ 日本列島の三万五千年一人と自然の環境史2 佐藤宏之・飯沼賢司責任編集『野と原の環境史』

うち、序章、終章、第9章「火と水の利用からみる阿蘇の草原と森の歴史—下野狩神事の世界を読み解く—」を飯沼賢司執筆 総頁353頁

2011年3月31日 文一総合出版

② 飯沼賢司編研究報告書『環境歴史学からみた「森」と「野」「原」に関する研究—日本の古代中世を中心に—』第1部1章火と水の利用から見る阿蘇の草原と森の歴史、補論 中国雲南省の水田・畑・森・ムラの調査紀行、第II部「森」と「原」「野」の資料等は、飯沼賢司が執筆。第1部2章歌謡における「野」の意味—三代集を中心として—は浅野則子が執筆。総頁156頁 2011年3月25日

③ 豊田寛三監修飯沼賢司編著 大分県の歴史シリーズ『海部・大野・竹田の歴史』 2007 郷土出版社 総頁246頁

④ 飯沼賢司監修編著 大分県の歴史シリーズ『大分・由布の歴史』 2007年 郷土出版社 247頁  
この図書の一部を浅野則子執筆

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年月日：  
国内外の別：  
〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表 飯沼 賢司 (IINUMA KENJI)  
別府大学 文学部 教授

研究者番号：20176051

(2) 研究分担者 浅野 則子 (ASANO NORIKO)  
別府大学 文学部 教授

研究者番号：50299682

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：